

祈りの文化を 受け継いでいく 人びと



Vol.
03

Autumn 2021

株式会社 新庄ニューライフ互助会
令和3年9月発行



バックナンバー

角川と共に歩む 廣際院



住職
瀧田一成 老師

角川地域の葬儀の変遷

新庄市内から車で約30分、戸沢村角川地区に廣際院があります。

永禄元年(一五五八年)大蔵村清水にあった清水城主六代清水孫三郎義氏の命により、興源院住持三世花陰俊英大和尚が月窓院を建立しました。義氏は日頃から佛法を厚く信仰し、天正14年(一五八六年)逝去し戒名が「廣際院殿霜岩雪公大居士」となったことから、月窓院の寺号を廣際院と改めたのが始まりです。

「角川は助け合いが強い地域なので、葬儀に関してもお互いに助け合ってきたと思います。その精神は時代が変わった今でも残っている地域です。」そう語るのは二十一世住職、瀧田一成老師です。角川地区には無尽講というものがありません。無尽講とは相互に金銭を融通し合う目的で組織された講をいいますが、金銭以外にも葬儀の時に出すお膳や食器なども講で持ち寄っていたといいます。こうした取組みが、国民健康保険発祥の地の素地となったのでしょう。

元来、角川地区は自宅葬が一般的でしたがこの5年ぐらいでホールでの葬儀に代わってきました。

「葬儀はこうすべきだとか、今当てはめようと思っても物理的に大変なお宅もたくさんあります。角川の人たちは仏心があるので私が何も言わなくても、助け合い、段取りをしてくれます。そういうお気持ちに支えられています。」と語ります。

また住職は言います。「昨年からコロナ禍で葬儀の形も変わりました。親族やご近所の繋がりが深い角川地区では以前、多くの人たちが葬儀の時に集まっていました。しかしコロナ禍で感染を心配し気を遣って自粛をして少人数で葬儀をすることが多くなりました。一般焼香を設けないとお別れする機会もない状況です。」

「病気から体を守るのは化学や医療ですが、心を守ることが出来るのは、やはり人の心です。思いやりをもち信頼に応え誰かのために祈ることが心を守ることにつながると思います。」

瀧田住職はいつまでも角川との地縁、家族や親縁の縁を大切にしたいと願っています。



はちまんざん こうさいいん
曹洞宗 八幡山 廣際院

場所 / 戸沢村大字角川669-1
電話 / 0233-73-2015



新型コロナウイルス感染予防対策

お参りの際はマスクの着用、手指消毒、体温測定の徹底をお願いしています。

音楽奏でる寺

Temple playing music



マリimbaは幅約3メートルもある鍵盤打楽器

一晃さんは、名古屋音楽大学音楽部1年生です。専攻はマリimba。打楽器であるマリimbaの音色は本堂を包み込むように響き、聴くひとの心に染み渡ります。お寺と音楽を通じて人々が交流できるような企画を主催したいと模索中です。



たきたいっごう 瀧田一晃さん
瀧田住職の長男。平成28年に得度。令和4年度に法戦式の予定。



八幡山 廣 際 院 瀧田一成 老師

昭和48年戸沢村角川生まれ。東北福祉大学卒業。卒業後鶴岡市善寶寺で1年半の修行。平成10年角川に戻り副住職となる。同時に一般企業に勤務する。平成29年第21世廣 際 院住職となる。

廣 際 院のこれから

廣 際 院がある角川地区は山間部にある大きな集落です。敷地の広い廣 際 院の周囲の手入れや草刈りなども、瀧田住職が一手に担っています。頭にタオルを巻いて作業する姿は、農業が盛んなこの地域にも溶け込み、親しみやすさを感じさせます。「人の心の中には生まれた故郷に対する想いがあります。人と地縁を守る皆がお墓、そしてお寺であると思っています。今は別の土地に住んでいても、お墓とお寺にお参りに来る方々がいます。彼らが帰ってきたときに、いつでも安心して訪れることができるお寺であるためには何をすればいいのか、常に考えています」お寺と人、人と人の糸を結びたいという想いは、坐禅会やコンサートといった独自の企画を主催することに表れています。そしてその想いを受け継ごうとしている息子さんは、平成28年に得度しました。「幸いにも私は息子というバトンを渡す相手がいるので、それまでの間、廣 際 院を大切に預かりしていきたいと思っています。」



蠟燭の灯りだけで行われる坐禅会

秋の実りと角川地区のお彼岸

農村である角川地区にとって秋彼岸は、丹精を込めて耕した土地、収穫、周囲の人々への感謝の期間です。人々は収穫したばかりの新米で餅や炊き込みご飯を作ります。当院でも彼岸入りには餛飩子団子、中日には五目ご飯、送り彼岸にきなこ団子を作る風習があります。人々は、これらを仏壇や墓前に供え、近所の人々にも振る舞います。一年の苦勞を互いに労い、今年は無事に感謝し、先祖様に報告する。農村に生きる私たちに「偏らない生き方」とは、「得たもの」を自分の手柄と奢ることなく、自分には誰かに生かされていることに感謝する生き方ではないかと思えます。もっと言えば、「私」に生きるのではなく、「公」に生きることを言ってもよいかもしれません。故郷の素朴な彼岸の風習は私たちに「偏らない生き方」つまり「中道」を教えてくれているのではないのでしょうか。

秋彼岸を迎える角川地区は、まさに実りの秋。夏の暑さも過ぎ、田は色づき、収穫を待っています。(瀧田住職)



廣 際 院から望む田園風景

廣 際 院の坐禅会

廣 際 院では毎月一回坐禅会が行われています。住職が先代からお寺を引き継いだとき、法事以外で檀家さんと触れ合う機会が欲しいと思いついた企画がスタートしました。

坐禅会はまず写経をし、30分坐禅を組みます。そして黙食でお粥をいただきます。「こういった機会を設けてお寺に親しんでいただき、交流の場になれば幸いです。」(瀧田住職)。



坐禅会でいただけるお粥



齊藤崇広

平成2年新庄市生まれ。曹洞宗大本山永平寺での修行を経て、現在は横浜の寶袋寺で納所中。

第三回 修行の決意

第二回まとめ

東日本大地震が起き、気仙沼にボランティアに行きました。そこで惨状を目の当たりにしたことが、葬儀に関わる仕事に就くことを目指すきっかけとなりました。

震災後しばらくすると通常の学生生活に戻りました。仏教学部禅学科では主に坐禅・曹洞宗の経典について学んでいました。当然、曹洞宗寺院の息子である友人も多く、「お寺の長男」としての相談につきあうこともありました。その中でも「本山での修行」は彼らにとって一生に一度と聞いていいほどの大問題です。実家のお寺を継いでいくには絶対に避けては通れない難関なのです。大問題・難関と書いてはいますが、なかなか一般の方には「ご理解いただけなかつたか」と思います。これからは、私の永平寺修行時代をいくつか紹介する事で、いくらかは分かっていただけではないのでしょうか。

曹洞宗は両本山と言つて横浜市鶴見の総持寺、福井県の永平寺が本山になります。私は、師匠が修行された永平寺を修行の場として決め、修行に入る準備を始めました。春上山(2月中旬)3月下旬に修行に入る。の場合12月頃に2泊3日の日程で永平寺での事前研修があり、修行に入る際の持ち物や、覚えておかなければならない偈文を、すでに永平寺での修行を終えられた方から丁寧に教えていただきました。その後は永平寺へ向かう3月6日まで様々な準備に追われました。自分の持ち物にはすべてマジックで名前を書きます。真っ白な下着の一枚一枚まで；まるで小学校一年生です。また、先輩から着物や衣の着方、扱い方などを教えてもらいましたが、お寺で生まれ育ったわけではないのですべてが難しく思えました。上山が近づいた数日はもうしばらく口にするのができない肉・魚を感慨深くいただきました。食べ納めでおいしいお寿司やとんかつを食べた時のあの気持ちは今も忘れられません。



そして平成26年3月、私は師匠と父に見送られ永平寺の修行へと向かいました。(第四回に続く)



発行人
代表取締役 齊藤慎一
明治四十三年創業「香花堂」4代目。ご葬儀、仏壇・仏具販売、ご供養のトータルサポート会社として100年余り、地域に支えられ現在に至る。

未だ収束の見えないコロナ禍で、リモート化だけでなく葬儀そのものが簡略化されつつあります。そんな今、私たち葬儀社こそ使命を持って「供養」の本質に立ち返る時に来たと感じています。受け継がれてきたこの「祈りの文化」を絶やさぬよう、お寺と人々の架け橋となる情報紙となれば幸いです。

ご葬儀、ご供養に関するお問合せ

0120-4194-03

365日24時間受付

〒996-0002 山形県新庄市金沢字中村 1284-1



香花堂